



9月10日

ながと  
山口県長門市

野外棧敷で観覧、色彩の競演が目を奪う

がくおどり ゆもと なんじょうおどり  
**楽踊・湯本南条踊** (あかさき  
**赤崎まつり**)

◆赤崎神社(飯山八幡宮)  
☎0837-22-2732

**馬蹄形の棧敷**

稀有な野外棧敷が長門市にある。2011年2月に出かけた。中国自動車道美祢ICで降りて約40分北上、東深川の赤崎神社へ。階段状の楽棧敷(国指定重要有形民俗文化財)が現われた。

摺鉢状の谷を巧みに使い、傾斜面に設けた観覧席。自然石を丹念に積み上げた。棧敷は北4段、東12段、南5段。馬蹄形が三丁くだ。三方を囲まれた平地で子どもたちが野球をしていた。指導の男性が話す。「毎年秋に楽踊と湯本南条踊を奉納します」。平地が踊りの場なのだ。

棧敷築造の経緯が興味深い。

慶長元年(1596)、悪疫が牛馬を襲う。牛馬の守護神・赤崎神社に祈ったところ平癒。そこで感謝の楽踊を奉納した。観覧席が階段状に整えられたのは江戸後期〜明治初期である。

**揺れる宝冠、翻る団扇**

棧敷で踊りを見たい。7か月後、再び赤崎へ。棧敷の傍には下川西、藤中両地区用にテントが立つ。職に奉納の楽踊を記す。「虎の子渡し」と「月の前の伶楽」。楽踊は元来、5種類を奉納していた。やがて湯本南条踊や地



楽棧敷。平地を三方から囲む



楽踊(下川西)。中踊が向き合う。外周は鉦打ち



赤崎神社に向き、拝礼

その後、「庭がため」という杖遣いの少年2人が棒で打ち合う。そして踊りへ。

踊は先の二葉になる。

出番の前に楽踊の主役、胴取が宝冠(通称花)を頭上に載せた。重さ約5kg。五色の紙片をつけた腰輪も着用し、太鼓を抱える。楽踊は基本的に男性が務める。午後1時半、近くのステージで奉納芸能の先頭を切つて三番叟が始まった。正明市連合会が演じる。午後2時、鉦・太鼓の音が響く。虎の子渡しだ。馬蹄形の、小さく開いた部分が入場口。幟を先頭に祭文奏上役1人、花持ち1人、警固4人、法螺貝1人、団扇遣い2人、杖遣い2人、胴取2人、鉦打ち10人と続く。整列し社殿に向かい、祭文奏上。「庭ほめ」といい、五穀豊穰・家内安全・家畜息災を祈つて踊りを奉納する

楽踊(藤中)。中踊がまわる。団扇に松・月、牡丹。社殿は赤崎神社





萩のまつり

31

萩焼深川窯の「サコンタ」

(長門市深川湯本)



サコンタ

「ギー、ゴトン ギー、ゴトン」。萩焼深川窯の里に、のどかな音が響く。音源は三之瀬川にある小屋だ。小屋から外に棒(杵)が延びていて、先端から垂れ下がったロープには木桶が付く。川から引いた水は懸樋に導かれ、この桶に落ちる仕掛け。桶はいっぱいになると傾いて水がこぼれ、空になる。その瞬間、棒はポンと跳ね上がり、小屋の中でゴトンと搗く音がする。坂倉新兵衛窯の所有で、釉薬の長石を砕く装置だ。地元ではサコンタと呼ぶ。九州などでは精米の水車をサコンタロウ(左近太郎)という。「迫の太郎」の意で、谷間で働く姿を人間になぞらえ「太郎」と名づけたようだ。さらに約めれば、サコンタ。黙々と勤む太郎への親愛の情にじむ。



懸樋の水が木桶に

※私有につき、見学の内はしていません



開放感あふれる観覧席



湯本南条踊。巨大な吹貫は圧巻

伝播した南条踊

南条踊は吉川元春と南条元統の戦に由来し、安芸から岩国、長門・俵山、さらに湯本へ伝わったといふ。

締め括りは楽踊・月の前の伶楽。午後3時から演じた。虎の子渡しの激しさに比べて胴取の動きが控えめでおとなしい。踊り全体が優雅だ。それは持ち物にもよる。団扇の図柄が松に赤い月、返せば牡丹。太鼓の胴は松・月である。



胴取の宝冠が華麗に揺れる

が動を引き立てる。

重さ20kgを背負い舞う

楽踊が終わると湯本南条踊が入場。幟、法螺貝、短冊、総大将、弓、鉄砲、槍、毛槍と続き、さながら武者行列だ。

度肝を抜くのが吹貫。丸に十字の形に竹を組み、赤・青・白の色紙で飾る。直径2m余り、重さ約20kg。男性1人が背負う。その後新発意(大将)が花団扇を持って入る。さらに側踊の列、太鼓打ち、鉦打ち、編木。再び側踊の列。そして、もう1本の吹貫。総勢約50人に及ぶ。楽踊は子どもが多かったが、南条踊は大人中心。踊り場が狭く感じられる。

外輪の側踊24人が円形をつくる。太鼓・鉦・編木の計6人は中央で向き合い、中踊の円形をなす。その円と外輪との間に吹貫担ぎ2人と新発意1人が立つ。隊形が整うと新発意が社殿に向かい、「トザイ、トザイ、南無赤崎大明神……」と唱え、踊り

中踊。唐人笠が異色



奉納を奏上。南条踊は大鼓や鉦の音に歌が重な

り、にぎやかだ。側踊が一斉に花団扇をかざすと爛漫の花園に遊ぶ風情。中踊は楽器を奏で、歌い踊りながら右へ回る。鉦打ちだけは少年で唐人笠が印象的。吹貫担ぎは回りながら、吹貫を左右に振る。吹貫は元来、旗の一種で戦場の目印。芸能に取り込まれ、雅に風流化したと思われる。新発意は大小を帯刀。肩にも刀を担ぎ、鞘から文箱を吊るす。

新発意



踊り終えた胴取が話す。「宝冠の重みはさほど負担ではありません。体を締め付けて宝冠を載せるため、呼吸がづらい。小刻みに吸い込みながら、踊ります」。玉の汗を浮かべ、缶ビールをひと飲み。大役を務めた安堵感に浸っていた。

高みで見ると踊りは格別だ。周囲は松林。背景は日本海と青海島。環境と一体の誇るべき劇場空間が今に活かされている。

胴取の背にも団扇と同じ図柄

